



羽根蟻 (クミクミ)

タンザニアでは10月の半ば頃より11月、12月にかけて気温が鰻上りに上昇する。又この季節は小雨期でもあるため、湿度が高く、黙っていてもジワジワと汗ばんでくる。

2年前の12月半ば頃と思うが、雨上がりの日曜日の夕べ礼拝堂で礼拝を執行中、開け放しの戸口から突然、羽根蟻の大群が侵入し蛍光灯のまわりは一瞬にして蟻の乱舞場となり静粛さが破られた。まるで扇子をつかう時かすかに出る音に似てパタパタと身体の2倍もある4枚の羽根を動かし、あたりかまわずぶつかってくるのには閉口した。オスの蟻が羽根をつけて飛ぶことは日本でもよく見かけたので不思議に思わなかった。ただ全体がコゲ茶色の胴体で異様に大きい羽根をつけたアフリカ生まれの蟻との突然の初対面で、すっかり怖気づき、顔のまわりや頭の上に不時着される度に神経がいらだち、お恥ずかしいことながら平和な祈りの心もどこかへ吹き飛び、思わず手で払いのける有様だった。

その時の体験はその後すっかり忘れていたが、ごく最近、同じ季節の12月初旬、たまたま訪れた家で羽根蟻の大群の来襲に遭った。室内の蛍光灯のまわりを乱れ飛ぶ蟻で大事な会話は中断、暫く幻想の世界にでも飛び込んだ感じで眺めていた。家の人々は一向に驚かず、びっくりしていた客の小生を案じてか、ご主人が羽根蟻の話をニコニコしながら語ってくれた。それ以来、今までの警戒心が吹き飛び、逆に親しみをもって手で触れるようになったから不思議だ。

タンザニアの人は、この羽根蟻のことを「クミクミ」と呼ぶ。雨期の3月より5月と10月中旬より12月にかけて、雨上がりの夕方「クミクミ」は大群をくんで人里に飛来する。街灯や門灯は勿論、家の中の灯火に集り乱舞を繰り返す。丁度繁殖期に当たるらしい。子供たちはバケツを手手に灯火の下で「クミクミ」採りに夢中になる。やがて、バケツに沢山たまった「クミクミ」を家

アフリカ便り



に持ち帰ると思わぬご馳走の到来に大喜びとなる。まず家族全員で「クミクミ」の羽根とり作業をする。主婦は庭に火を燃やし、フライパンを温め、その中にヤシ油を注ぐ。やがて熱くなった油の中に羽根をとった「クミクミ」に塩を振りかけながら入れて煎る。これが「クミクミ油炒め」で、早速、夜遅い家族全員での夕食に出され、主食のウガリと一緒に食べる珍味となる。

日本の人はイナゴを食べる。この「クミクミ油炒め」も素晴らしくカルシウム分に富んだ栄養品と言わねば。ご主人の話を伺って「なるほど」とうなずいてしまった。どういふことで「クミクミ」を食べるようになったかが判らないが生活の知恵といおうか、まことに妙を得た神の配剤と感じ、それ以来「クミクミ」が飛来するのを楽しみに待つようになった。

渡辺 政直
元日本聖公会主座司教。一九八六年に退職後、「再度現場の第歩に戻り、人々の奉仕活動の道を歩み続けたい」という希望のもと一九八七年七月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において貧しい人達や同僚にある「HAMISON TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（EPISCOPAL CHURCH）でも奉仕活動を行っている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。